

研究年報『神奈川大学アジア・レビュー』創刊にあたり

アジア研究センター
所長 秋山憲治

今、アジアは世界の成長センターとして、アジアおよび世界の発展に影響を与えている。国境を簡単に超えるグローバル化社会で、国際分業が形成され、経済統合も進展している。アジアの相互依存関係は経済のみならず社会のあらゆる分野に及び、共同体の形成についても論じられている。まさに、21世紀はアジアの時代と考えられる。

しかし、多くの懸念材料がある。急速な経済成長が、世界のパワーバランスに変化を生み出している。エネルギー・天然資源を巡る獲得競争も激化し、領土を巡る国際紛争が起り、国際政治や安全保障面で不安定状態に陥っている。市場経済によるグローバル化は競争激化を生み出し、それに伴って起こる経済格差の問題も深刻である。国内外にわたる格差拡大が社会を不安定にしている。地球温暖化による気候変動は自然災害の脅威をもたらし、また、環境汚染は人体や生態系へ深刻な被害をもたらしている。急激な人口増加がある一方、少子高齢化に悩む国もあり問題は複雑である。

2013年4月、アジアの諸問題を総合的に研究する目的で、神奈川大学アジア研究センターが開設された。個別学問分野の枠を超えた学際的な研究やそれを担う研究組織が必要と考えられた。アジアおよびアジア地域で起こっている現状を、現地に密着しながら、政治、経済、社会、文化、科学・技術などあらゆる視点から学際的に研究し、総合的に把握することが必要と考えられる。

開設を記念して、2013年12月国際シンポジウムを開催した。日本を含めたアジア7カ国の著名な研究者を招待し、「アジアのパラダイム・シフト—協力と共生への道を探る—」のテーマのもと、記念講演と三つのセッションを設け、学術的な国際交流を行った。また、現在、六つの共同研究プロジェクトを立ち上げた。その内の一つは、センター全体で取り組める総合研究としてアジアの水問題を取り上げた。水不足や水質汚染など水問題は、われわれ人類にとって今世紀最大の課題である。本学の6つの学部から研究者の参加を得、外部の専門家を招き、「アジアの水の総合的研究」として研究を開始した。そのほかに五つの個別テーマの研究も開始され、それぞれ複数学部の研究者から構成された共同研究で学際的分析が行われている。

本センターは、文献・資料を収集・解読し、現地調査を実行し、国内外の研究者を招き、研究会や講演会、シンポジウムを開催し、研究成果を内外に発信する。ここに創刊する研究年報は、激動するアジアの現状を、研究論文、シンポジウム報告、時事論評、書籍紹介、エッセイなどを通じて総合的に把握することを目的とする。学術交流を通じて、アジア諸国の発展や信頼醸成の形成、ひいては世界の平和に貢献できるよう努力していきたい。